

小林一茶の俳句―動物に着目して

片野修

芭蕉と一茶

長野県には小林一茶の記念館が二つある。一つは一茶の出生地である信濃町の柏原にある「一茶記念館」、もう一つは多くの門人がおり逗留することが多かった高山村の「一茶ゆかりの里 一茶館」である。最近、この二つの記念館を訪ねるとともに、一茶の俳句や人生に興味をもったので、ここにまとめてみたい。

俳句については、これまでは松尾芭蕉のほうが馴染み深く、私がよく釣りにいく山形県や新潟県で名句が残されている。

とくに気に入っている芭蕉の句は、象潟で詠んだ「象潟や雨に西施がねぶの花」。雨が降る象潟の風景を、中国の悲劇の美女、西施の憂いに重ねた名句であり、実際に雨の象潟を訪れて味わった覚えがある。かつては多くの島が見られた象潟は、海底の隆起によって陸地となり、現在では水田の間に小山が点在しているが、それもまた小山たちが悲しんでいるように感じられる。象潟はおいしい岩ガキが味わえることでも知られているが、芭蕉は岩ガキを食べたであろうか。

「荒海や佐渡によこたふ天の河」の句碑は、北陸自動車道の米山サービスエリアにあり、そこから佐渡を見ると感慨深い。佐渡の金北山やドンデン山には行ったことがあるので、高く見えるのはあのあたりだろうか、想像してみたりする。ただし、海が荒れた夜に佐渡が見えるはずはなく、この句には芭蕉の空想が加えられている。

一茶は 1763 年に北信濃の柏原で生まれたが、幼いころに母を失い、継母との関係が悪化したために、江戸に奉公に出た。その後、25 歳になって葛飾派の俳諧師として頭角をあらわすようになるが、生活は苦しかったようだ。このころの名句に「棕鳥と人に呼ばるる寒さかな」があり、長野からの奉公人はムクドリと呼ばれて差別されたらしい。

1789 年、一茶は 27 歳のときに、芭蕉を慕って象潟を訪れている、芭蕉の旅から 100 年後にあたるが、同時にフランス革命がおこった年でもあった。先に挙げた芭蕉の名句を受けて、「象潟もけふは恨まず花の春」と詠っている。その後、一茶は修行の旅に明けくれて、関西から四国、九州まで出かけるが、出かけた先では当地の俳人と交わり、腕試しをすることになる。下手な句を詠んでいたら、だれにも相手にされなかったであろう。1800 年には、諸国人気俳人番付で上位に載せられるまでになった。この頃の名句に「秋の夜や旅の男の針仕事」がある。

一茶の生い立ちと門弟

高山村との縁は、1810 年に当地の俳人、久保田春耕を尋ね、逗留先を提供されたことか



信濃町柏原の「一茶記念館」



高山村高井の「一茶ゆかりの里 一茶館」

ら始まり、ここで多くの門人を育てることになった。1814年、52歳のときに、きくと結婚し、4人の子をもうけるが次々に夭折し、最後には妻のきくも亡くなり、一茶は一人きりになる。一茶の代表作である「痩せ蛙負けるな一茶是にあり」は、悲しい境遇の中で生まれた作品である。闘っている痩せた蛙を応援しているのだが、その蛙は一茶自身とも読みとれるし、病気と闘っている息子であると受け取ることもできる。1824年に一茶は再婚するが、まもなく離婚し、1826年に三度目の結婚をするも、母屋が火事になり土蔵暮らしを余儀なくされる。

故郷の柏原では、母違いの弟との確執があり、必ずしも幸せではなかったようだ。火事ののちの土蔵暮らしは厳しかったと推察される。この年に一茶は65歳で生涯を終えた。

各地に門弟があり、比較的裕福であった芭蕉と比べると、一茶は数々の苦難を生きてきた。若いころは修行の旅に出て、各地の俳人と交わった。江戸では猛勉強に猛勉強を重ねて、過去の俳句や日本の歴史について研究した。俳句だけで生きるということは、門弟や支援者の協力に頼るということだ。「春立や四十三年人の飯」という句は自虐的であるが、それができるのも腕があったからだといえよう。一茶はしだいに当時の俳句界で知ら

れるようになっていったが、芭蕉と比べれば知名度は低く、その作品は後年になって正岡子規や夏目漱石によって評価を高められたと考えられている。長野での晩年には、子や嫁が相次ぎ亡くなり、孤独の中で暮らしていたのだろう。「故郷は蠅まで人を刺しにけり」は、故郷柏原の冷たさを憎んだ句と言われている。

一茶の俳句

漱石が指摘したように、芭蕉は自然の妙を詠むことが多かったが、一茶は人間や動物の心情を詠むことが多かった。芭蕉の句でも、たとえば最後の句である「旅に病んで夢は枯野をかけめぐる」や「口切に境の庭ぞなつかしき」のように、感情豊かなものもあるが、多くは自然の情景を詠っている。「五月雨をあつめて早し最上川」や「五月雨の降残してや光堂」などは、その代表作である。

一方で、一茶の俳句は、人や動物の悲しみ、孤独、はかなさを詠んでいる。滑稽でおかしみのあふれた作品は人間的であり、そのことが後世の評価につながったと考えられる。一茶は芭蕉を尊敬して東北を訪れているので、あえて芭蕉とはちがう俳句を詠もうとしていたのかもしれない。芭蕉も一茶も、独自の道を切り開いたからこそ、多くの作品が後世に残っているのだと思う。

ここで話は飛躍するが、昔、京都大学の研究室で、自由な発想のもとに生態学を見つめなおすセミナーが開かれていたことがある。そこで私の番になって、吉本隆明の『言語にとって美とは何か』をとりあげたことがある。この本はとてもむずかしいが、簡単に言うと次のように要約される。

たとえば、「青い山に白い雲がかかっている」という文章は、だれでもその風景を思い浮かべることができるという点で、何を指示しているかわかりやすい。「五月雨を集めて早し最上川」という句も、同様にわかりやすく、その内容は「指示表出」ととらえられる。

一方で、「青い山と白い雲を見て、なつかしむ」となると、作者がなぜなつかしむのか、懐かしむ心情はどのようなものなのか、簡単にはわからない。ここには作者の思いがこめられており、これを吉本は「自己表出」とした。一茶の句では、「這え笑え二つになるぞ今朝からは」という句は、自分の子が二歳になる喜び、すなわち自己表出をあらわしている。

文学は指示表出と自己表出が織りなす布であるとみなすことができる。その点で、芭蕉の句は指示表出に長けていたとみなせるし、一茶の句では自分の感情に正直に自己表出を詠んだものが多かった。指示表出だけの文章は無味乾燥で味気ない。私は生態学も文学のようなものであり、指示表出だけでなく、自己表出も重要ではないか、というようなことを言った覚えがある。生態学においては、生物の生態を自然から抽出して描くわけだが、その切り取り方には研究者の個性や創意が必要だ、と言いたかったのだろう。

動物についての俳句

一茶の俳句には、自己表出があふれている。自然や動物を描いていても、それに対する一茶自身の感情や、動物や植物からの視点が反映されている。その作品は生涯で2万とも言われ、私はその一部しか知らないけれども、興味深いものが多い。ここでは、動物をテーマにした句のいくつかを紹介したい。

一茶は動物の中でも、とくに蛙が好きだったようで、蛙についての句が多い。

「座とりけり大蛙から順々に」は蛙の世界にも順位があることを詠っている。「じっとして馬に嗅ぐる蛙哉」は、ユーモアにあふれつつ、馬と蛙の種間関係について詠ったといえるだろう。「大蟾（ひき）は隠居気どりやうらの藪」は、大きなヒキガエルが尊大に見えるさまをからかった作品である。ここでは動物の個性に言及しているとみなすことができる。

このほか蝶、蛍、蚊、蟬など、昆虫についての句も多い。「猫の飯打ちくらひけりきりぎりす」や「初蝶の一夜寝にけり犬の枕」はおもしろい句であり、一茶が実際に観察したことを題材にしていると考えられる。「うろたへな寒くなるとて赤蜻蛉」では、赤蜻蛉の身になって冬に近づく季節を詠んでいる。「馬の尻に目覚て見れば飛ぶほたる」は一茶の経験によるものであり、馬と蛍の組み合わせが妙である。「目出度さはことしの蚊にも喰れけり」では、年をとった自分でもまだ蚊に喰われるくらい若々しいと見栄を張っている。

鳥の句である「よし切やことりともせぬちくま川」は、激しく鳴くヨシキリの前では、千曲川も静かに感じられることを詠っている。「みそさざい鳥には屑といはるるか」は茶色く目立たない鳥であるみそさざいであるが、実際には際立って美しく鳴くことを知っていたのだろう。ウグイスについての句も多く、「瘦藪の下手鶯もはつ音哉」はウグイスの初音が下手なこと詠いつつ、貧しい家で下手な句を詠む一茶自身を指しているのではないかと解釈されている。名句として知られる「やけ土のほかりほかりや蚤さわぐ」は、自宅が焼けたのち土蔵で生活していたときの作品で、自虐的だがユーモラスでもある。

哺乳類についての句では、猫や犬についてのものが多い。「恋猫の源氏めかする垣根哉」は、一茶が源氏物語を読んでおり、垣根越しに雌猫をうかがう雄猫を、幼い少女を覗いていた光源氏に例えている。ひねった句ばかりではない。「猫の子のかくれんぼする萩の花」は、とても素直でかわいい俳句である。よく知られている「雀の子そこのけそこのけ御馬が通る」もわかりやすい。

魚や川についての句は少ないが、「白魚のどつと生るるおぼろ哉」や「蜻蛉の尻でなぶるや角田川」などの句が残されている。この2句も素直な情景を詠んでいる。これらに対して、「魚どもの遊びありくや菊の花」は、水中にある菊の花のまわりを魚たちが遊んでいることを詠んでいるが、少し妙である。解説を読むと、この句は一茶が台風に見舞われて利根川が氾濫したときにつくった句であり、陸地が冠水したところで魚が泳いでいるさま

を描いているらしい。氾濫した川では、水は濁っており、魚の姿を目視することはむずかしい。そんな川に近づくのも危険である。だから、一茶は魚の身になって想像をふくらませたのではないかと思われる。私はこの句が一番好きである。

一茶は旅行先で詠むこともあったが、多くの場合、家の周りで観察した動物を詠んでいた。身近なところで居合わせた動物の心情をおもんばかって句をつくり、その個性に着目したという点では、宮沢賢治に通じるものがある。その動物はその場で困難に立ち向かう個体であり、その個体と一茶が共鳴して名句が生まれている。自虐的なものもあるけれども、動物と自分を対比させる点は、芭蕉や与謝蕪村とは決定的に異なっている。私は、小林一茶という俳人は、もっとも早く動物の個性を文学に取り入れた一人だと思っている。

俳句は短くて簡潔だから、文学あるいは芸術としてはいかなものか、という意見もある。一茶の句は、あまりに私的な感情が含まれており低級だという批判も受けてきた。俗語や方言も多い。たとえば、「僧正が野糞遊ばす日傘哉」のような句は、読む人によって評価は分かれるだろう。俳句として芸術性に欠け、言葉を安易に選んでいると言われることもある。しかし、俗っぽさの中に人や動物の真実があるからこそ、一茶の俳句は時代を超えて愛されているのだと思う。

一茶は苦難の人生を歩んだと言われるが、65歳まで生き、俳句の道だけで暮らし、最終的には多くの門人に慕われ、後世に名を成したのだから、充実した人生を送ったとみることができよう。

追記：2026年の10月11日に信濃町の一茶記念館で「おらがふるさと一茶まつり」が開催される予定です。

参考文献

一茶句集（現代語訳）（2013）玉城司 訳注。 角川文庫
吉本隆明（1982）言語にとって美とは何か 1, 2。 角川文庫